

# 深澤晟雄の会ニュース

第 6 4 号

特定非営利活動法人 深澤 晟雄 の会  
(2013 年 4 月 15 日発行)

資料館入館者の推移 (暦年:人)

年	町内	県内	県外	合計
20	431	1,110	314	1,855
21	318	2,368	1,196	3,882
22	173	2,414	2,121	4,708
23	103	1,583	972	2,658
24	87	1,138	879	2,104
計	1,112	8,613	5,482	15,207

(注) 20年は10月19日~12月末まで

## 入館者なお減少傾向 県内は前年の8割弱

深澤晟雄資料館の24年の入館者は2104人で、過去4年間の通年比較で最低となりました。前年対比で入館者は県内外ともに減少、特に町内を含む県内27%の減少率が目立ちます。入館者総数でも前年の21%減、ピーク時22年の55%減です。資料館は平成20年10月に開館、深澤生命行政の相次ぐ映画化で、22年をピークに入館者が増え続けましたが、23年は東日本大震災で入館



者が激減、特に県外は福島原発の風評被害もあって54%の大幅減でした。特に県外からの入館者は町内の温泉泊が多く、資料館以外の観光コースの問い合わせもあつて一定の経済効果にも貢献し

昨年9月2日・3日花巻温泉で開かれた全日本医連共同組織活動交流集会参加者で、1日〜3日までの間に全国各地から希望者193人が17班に分かれて資料館を訪れました。写真は大阪・京都・愛知の皆さんです。

ています。今後ともスタッフフ一同頑張りますので、皆さんのご支援をよろしくお願いたします。

## 資料館の職員が交代

土井さんから水野さんへ

深澤晟雄資料館の顔として親しまれた土井政江さんが惜しまれながら退職、4月1日から水野節子さん(写真)を迎えました。



住田町から沢内太田に移住して2年、水野さんから皆さんへのご挨拶です。

旧沢内村深澤村長の功績は県内に住んでいたのでよく聞いておりました。このたび、資料館にご縁があつたのは、西和賀に移住した新町民として、深澤精神を学び伝えることを自分に課せられたような気がしました。

## 「いのちの山河」岡山県で上映会

深澤晟雄の半生を描く映画「いのちの山河」の、岡山県での上映日程が次のように決まりました。会場近くの知人友人に知らせてあげましょう。

5月25日 里庄町健康福祉センター  
11月2日 早島町ゆるびの舎

これからは、皆様に教えられて「いのちの館」から「生命尊重の精神」を広く発信していきたいと思えます。前任者同様よろしくお願いたします。



深澤晟雄資料館で著者の佐藤俊一氏

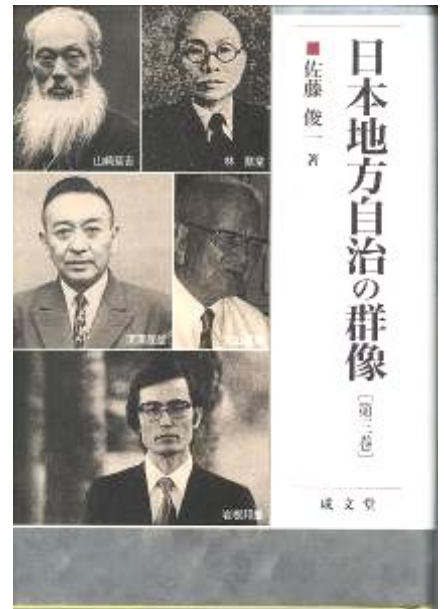
# 新たな視点で 深澤行政描く

佐藤俊一 著

## 「日本地方自治の群像(第3巻)」

昨年12月、淑徳大学佐藤俊一教授の著書「日本地方自治の群像{第3巻}」が出版され、「深澤生命行政の創成と継承」が、これまでにない新たな視点で現地調査と資料を分析、深い考察を加えて旧沢内生命行政を解明する。それは沢内村史の戦後編ともいえる内容で読む人を惹きつける。

著者の佐藤俊一氏は現在、淑徳大学コミュニケーション政策学部教授で、地方自治関連の著作が多い。「日本地方自治の群像」第1巻は2010年、翌11年第2巻に続く今回の第3巻である。出版社の成文堂は本書を次のように紹介している。「戦前から現在に至る日本地方自治の思想と実践に大きな足跡を残した人物の再発掘シリーズ第3巻。日本の地方自治に関するこれまでの分権の論述・分析をより豊かなものにする、注目



「日本地方自治の群像(第3巻)」の表紙。昨年12月、成文堂より出版。B6判で価格3,700円+税。

### 自治功勞の 5氏を収録

の書である。」

第3巻には深澤晟雄のほか次の4氏が登場する。

山崎延吉||石川県出身の農政家。「農は国の本(もと)」という農本主義者。

林献堂||日本統治時代の台湾の政治家。台湾地方自治連盟を結成、顧問に就任。

大山朝常||戦後、琉球立法院議員。沖縄のコザ市長。4期、祖国復帰運動に尽力。

岩根邦雄||今や、全国に34万人の大組織を誇る生活クラブ生協の創立者。

### 生命行政の 創成と継承

深澤生命行政は第4章で

「岩手県沢内村・生命行政の創成と継承―深澤晟雄村長たち―」である。目次ははじめに||深澤晟雄の略歴 第一節||深澤村政―生命行政の創成 第二節||久保・太田村政―生命行政の継承 必ずびに||内記・高橋・加藤村政 という内容で構成されている。

著者は「あとがき」で深澤生命行政の第4章に触れて次のように述べている。

「沢内村が国に先駆けて実施した老人医療費無料化施策の展開については、これまでの研究などに生命行政を創成した深澤晟雄村政に焦点が当てられ、その継承や変化などについてはあまり考察されてこなかった。そこで、本章はそのことを念頭にし、旧沢内村が合併して西和賀町になるまでの生命行政の創成から継承を考察することにしたわけである。その意味で、本章は戦後の沢内村史という側面もある。」